

# ヨーロッパの旅

郷愁

平井信義

フランクフルトについてようやく一か月を経た頃のことである。

日曜日とに市内の目ぼしい所を見終えた私は、次の日曜日をどのように暮らそうかと考えていた。普段の日は、グネールさんをはじめ、日本から紹介してもらっていた人たちから次々と招待を受けて、忙しい日を送っていたのであったが、日曜日はおよそ招待がなくて、孤独な散歩を楽しんでいた。街という街は、バスに乗ったり歩いたりして、ほとんどくまなく見て歩いた。ゲートハウスにもいった。ローメルと呼ばれる市の記念館にもいった。市の隅々から見えるカトリックの教会の、夕方のミサにも入ってみた。マインの河辺では、右岸も左岸も歩きながら、かもめの飛び交う十月の朝の空気をすがすがしく吸った日もあった。

しかし、日曜日の招待は不思議になかった。日本にいた時、外人の友人を紹介されて、その人の日曜日を淋しく過ごさせないために、いろいろプランを考えては引き廻した記憶から、日曜日の招待がないのはどうしたことだろうとも思ったりしたが、ことばのじゅ

うぶんに通じないために絶えず緊張をして友人と過ごすよりも、むしろ孤独でいることの方が私には気楽であった。

ところが、十一月の初め、ディッケルト君から次の日曜日の招待を受けたのである。彼をよく知っているわけではない。彼は産婦人科の医者であり、私のつとめている小児科には席がなかったから、朝の連絡会議に出たり、教授の廻診につく程度で、その折に会釈するほかは話をする機会がなかった。それが、水曜日の午後、ひとり図書館で文献を読んでいたところへ、何か本を探しに入ってきたのが彼であった。

「前からお話をしたいと思っていました……」と彼はいった。「どうもドイツ人には気の重い人が多く、あなたは淋しい思いをすることが多いのではないですか？」

「いいえ、それ程でもありません」と私は答えた。

「私は半年前までアメリカにいました。そして、日曜日ごとに友人から誘われて、淋しい思いをしたことがありますでしたが、こ



でのあなたの日曜日は友人が誘ってくれますか？」

「いいえ、まだありません。しかし、私はそう淋しいとは思っていません」

「でも、私にはあなたが淋しそうに見える。今度の日曜日、私がタウヌス山に案内しましょう。時間がありませんか？」ときいた。

タウヌス山は、フランクフルト市の北方の小高い丘で、そこから市および市の周辺がよく見えるという。

東京で言えば、高尾山のような所であったし、冬はスキー場になっていた。私は同行することを喜んだ。そして、朝の九時に私の下宿に自動車を迎えてくれることに決まった。

その日は、ところどころに薄雲がかかっていたが、天気はまずまずであった。彼は厚手のレインコートを着て、時間から十五分遅れて私の下宿のベルを鳴らした。

町から村へ、村から町へ、ディッケルト君の自動車は、時速八〇軒ぐらいで走っていく。自動車道路はよく整備され、彼の運転も巧

みであったので、自動車の旅は快適であった。

しかし、昼飯のために自動車をおりて草原に腰を下ろし、かんたんな食事をすませた頃から、私には、彼と一しょに来たことを後悔する気持が動き始めていた。お腹が適当に張ると、私はじっと丘からの眺めに気を奪われていた。目の前には、なだらかな丘の波が幾重にか入り乱れ、その間に赤い屋根と黄色い壁の家々が建ちだんだんと小さな赤い点となり、その果は紫色に煙る空の中に消え入っていた。その奥にフランクフルトの町が拡がっているというディッケルト君の説明であったが、私は、町を見るよりも、紫の雲と点在する人家を抱えている丘との調和に、強く心をひかれていた。それが俳句になるにはちょっと遠い気持ではあったが、この情景がいつかはまとまって句になるのではないかと思ったりした。

その時、ディッケルト君が私を詰問するような口調でいった。

「何か気に入らないことでもあるのですか？」

このことばに、私の方が驚いてしまった。

「いいえ」と私は答えた。

「それでは郷愁なのですか？」

「いいえ」

彼はちょっと肩をすくめるようにした。この時の私の気持をもっと説明すればよかったかもしれない。しかし、私には適当なことばが見つからなかったので、「サイン（いいえ）」という答えしか出なかったのである。



夕方、すでに市に近くなる頃、もう一度同様なことがあった。ちょうど丘を背にして真っ赤な太陽が沈むところであった。二人は自動車をとめて、右脇の土境にのぼり、刻々と光を淡く低くしていく太陽を眺めていた。

「すばらしいじゃないか！」

と彼は私の横顔を見て大きな声でいった。私はその声にひかれながらも、太陽の沈んでいくその美しさを惜しむ気持が、彼への返事をおろそかにしてしまった。

「どうしたのです。また郷愁ですか、淋しいのですか？」

彼をふりむくと、まじめに私に問いただそうとする表情が汲みとれた。

その日、私は自分の部屋に戻ると、何か気が滅入っていた。そして、ディッケルト君のこの二度の表情とことばがよみがえってくるのであった。

その後、四、五人の友人と、湖を見にいったことがあった。その時、初めてディッケルト君が私を問詰

めようとした意味が了解できた。私どもの車が、湖を眼下に見下ろすレストランに着くと、そこここに一斉に叫び声が上がった。「すてきじゃないか」「すばらしい」「何と美しい」——などのことばが発せられ、その度にうなずき合うように顔を見合わせている。緑をいっぱい水に吸い込んだような青い湖。そこには船も浮いていない。私は思わずぐっと喉が詰まる思いがした。この人たちの声がなければ、静寂だけが残るであろう。

その時、友人のひとりが私に向かってきいた。

「ドクターひらい、どうして寝めないのか」

私はこの時初めて

「すばらしい(ブリーマ)」

と言った。しかし、言ってしまったからその自分のことばが虚ろに響き返ってきた。友人に合わせて、「すばらしい」を繰り返せば繰り返すほど、私は淋しくなってきた。ひとりになりたくなった。故郷にいる自分を考えた。深い郷愁に襲われた。

鑑賞ということばがある。しかし、鑑賞の態度が、こんなにも違っている。こうした鑑賞の態度の差は、どこから生まれてくるのであろうか。あるいは生まれてきたのであろうか。私は私どもを育てた日本の文化的環境を考えた。中学から大学にかけて、謡曲や俳句に熱中した自分自身を思い起こした。禅に興味をひかれて、永平寺に参禅の機会を得たこともあった。それは長続きがしなかったが、闇の中に杉の梢のかすかにゆらぐ音がきこえたような気がしたことも

タウヌス山への道すがら田園の風景を楽しむ



思い出された。その後茶の湯も習った。

波独の決まった年の春、たまたま京都に桂離宮と修学院を見る機会に恵まれたことで、ヨーロッパにおける風物の鑑賞の態度に大きな影響を受けたはずである。ことに修学院は私の心をいっばいに占めていた。ヨーロッパの各地で美しい建物・庭園を見たが、それと対比していつも修学院の印象が蘇ってくるのであった。

しかし、私が吸収した文化は、日本の伝統といわれるものばかりではなかった。いろいろなモティヴがあったとはいえ、西洋音楽と文学とは私が最も多く楽しんだものであり、当時小遣いはほとんどが本とレコードに注がれたといってもよい。音楽では浪漫派の巨匠シューマンに最もひかれ、夢で初めてこの人の音楽としてきいたのが、クライスレリアーナの第七番であった。この曲の激しさがどうして私に受け入れられたのであろうか。

いずれにせよ、何らかの形で私の中には日本の伝統的な文化と西欧の文化とが吸収され、それが私の鑑賞の態度や日常の生活態度を

作り上げていることになる。この点についての分析は、現在、いろいろな形でおこなってみているが、子どもにどのような文化をどのように与えるかは、次の時代を背負う子どもを育てる上で大いに考えなければならないことに思われる。その際、日本古来からの文化と、西欧に発達してきた文化とが、日本人の体質の中でどのように融け合い、そして新しい文化を創造し、あるいは鑑賞の態度を形成するかということ、子どもに関心を持つものは常に考えておく必要があると思う。

私自身は、ヨーロッパの文化に対して、遂に融け込めなかった日本人であった。鑑賞は、ついにひとりですることに決めてしまった。外国人と行動を共にしたのは、その後ギリシャからエジプトへの飛行機の旅から、二日ほどベルギーの若者と一しょになっただけであり、これも経費の点からであった。

そのように、ひとりでヨーロッパの各地を廻ったとは言え、私の心に沁々と残る風物は少なく、ことに、建物と庭園とは遂に修学院ほど私の心を捉えるものがなかったと言ってもよい。

旅行から帰って、下宿の部屋のソファーに腰を下ろすたびに、激しい郷愁が舞い戻ってきて、私はビールの栓をあけた。私の量以上にそれが体内に入っても、顔だけは赤くなくても、郷愁はぬぐい去ることが出来なかった。

☆

☆